

される側から感じた『評価』

江原広美

ガバレ農場（元日本国際ボランティアセンタースタッフ）

1. エチオピア農村復興プログラム

私は1989年より2年間、エチオピアにおける農村復興プログラムに関わりました。このプログラムは1985年のエチオピア大飢饉の際に日本国際ボランティアセンター（JVC）が緊急救援としてアジバール村に病院を設営し、医療協力をしたのが出発点でした。飢餓が終息に向かい始めた時点で当時のスタッフは関係役所、村人などから情報を収集し、何が飢餓の原因となったのかを明らかにしようとしていました。その結果、干ばつ等の自然条件、内戦等の社会的な条件が引き金になっているが、問題の本質は農村にあるとし、生態系の回復を目指した植林、農業技術を伝える人材の育成、母子保健活動の核となる人材を育てるための「お母さん学校」、安全な水を確保するための井戸の保全などを組み合わせた農村復興プログラムが立ち上がりました。このプログラムの目的は、飢餓が起きたときにも農民たちが食糧援助に頼ること無く生活を維持していけるような村作り、農民の自立とういうことでした。慢性的な食糧不足がみられる農村でのNGO活動はフード・フォ・ワーク（FFW）という形式をとる場合が多く、日本国際ボランティアセンターでも植林や井戸の整備の活動に参加した農民へのFFWを続けていました。そして、内戦による一時的な活動地変更から再びマーシャ村に戻ったJVCスタッフは、新たに再開する活動に関してはFFWを取り入れないことを農民との話し合いで決定し、農民を巻き込みながらの農村復興プログラムをスタートしました。しかし、政権の交替による混乱も加わり、FFWをやめたJVCに対する農民の反応はJVCの倉庫に手榴弾が投げ込まれる、スタッフが投獄されるという事態になり、結局、活動地の変更を余儀なくされたのです。

2. 現場での評価

- * 役所による評価：エチオピアでの活動は政府との契約のもとに行われ、NGOはどれだけの資金をプロジェクトに費やすか、道路や建物の建設などハードな部門にどれだけ資金を投入したかが評価のポイントとなります。
- * 活動者による評価：活動者自身による評価は、「自分たちのプロジェクト」に対する愛情や「思い入れ」がある種の障害となって、客観的な判断を鈍らせるという危険性があります。しかし、私が参加した農村復興プロジェクトは、医療協力に関わった日本人の強い「思い入れ」が出发点となり、この思い入れが困難な状況を乗り越える力となりました。「思い入れ」は時として評価の判断を曲げることもつながりますが、「思い入れ」なしでは住民との信頼を築くことは難しくなります。評価をする方法としての、「参加型評価」がJVCが取り入れている方法ですが、村落調査をする場合でも、聞き取りをする場合でも、そこに住む人たちの本音をどう引き出せるかが大きなポイントとなります。
- * 主体者の評価：私たちは、そこに住む人たちの自立であるとか、生活の向上を目指して活動を進めます。この活動の主役はそこに住む人たちで、NGOのスタッフは日本人であれ、エチオピア人であれ外部者にすぎません。活動の対象としていた村の若い農業アシスタント、母子家庭のお母さんたちが積極的になった矢先、私たちは、手榴弾を投げ込まれるという極端な方法での評価を受けました。もちろん、これは村全体の意志ではないと思いますが、私たちは逃げ出す以外に方法がなかったのです。対象となる村の中で暮らす様々な人たち、その中で私たちが関わろうとする主体者の評価が村全体の評価とは異なる場合も少なくありません。

3. 同じ農民の立場として考える評価とは

有機農業を実践する人の多くは、周りからの評価に対してはあまり関心を持ちません。仕事の手を抜いたときには自然から厳しい評価をうけ、作物が全滅することもあります。野菜がまずくなれば消費者はすぐに離れてしまいます。自然と人との信頼関係をしっかりと作ることが私たちの有機農業の基本です。もし、私たちがエチオピアの現場に今、行ったとしたら、同じ農民として感じ合えることができるはずです。同じ視線で、同じ高さでものをみることができると確信しています。NGOのプロジェクトが村に、村人の暮らしにどういう影響を与えたか、村人の自立は達成できたのか、などNGOとして評価することは必要です。しかし、それは外部者として外部者がどう関わったかを判断するものであって、主体者である農民やなかなかもの言えない女性たちにとっては、あまり意味のないものかも知れません。評価の実施に、どれだけ主体者と同じ視線でものをみることが出来る人が関われるかが評価を左右すると思います。